

蒲原～吉原～原 20.5km を歩く

クリスマス前の12月23日～24日、旧東海道の上記区間を歩きました。天気予報をしっかりとチェックしてこの日を決め、青春18切符を2枚買い求めました。宿もお値打ちなビジネスホテルを予約し、いつもの4人でかけました。

いつもの電車も祭日だと……

6.33"の電車に乗り大府駅で浜松行きの区間快速に乗り換える、いつもの混雑がなくて空いているのが分かる。そういえば今日は祭日だった、あと10数年もすると今日の祭日は私の誕生日である2月23日に変わるのかな？おかげで大府駅から腰掛けることが出来た、でも席はバラバラだった。しかし、刈谷駅では大勢の人が降りたので4人でボックス席に陣取ることができた。岡崎駅からは各駅停車になり、豊橋近郊の通勤列車としての性格が強い。豊橋を出ると列車は浜松付近と静岡付近で多くの人で混雑する、やはり大都市の力は大きい。それに今日は私たちのようなウオーキングスタイルのシルバークルが多く目に付いた、みなさん洒落たシューズをはいている。どこへ行くのかなと思っていたら、興津駅で多くの人降りた。駅舎の方を見ていたらテントと、JRのさわやかウオーキングの幟旗がちらりと見えた。きっと「さった峠」コースを歩くのだろう、このすばらしいお天気だから海の青さと富士山の美しさを堪能出来るに違いない。

そうこうしているうちに10.25"定刻どおりに富士川駅に到着した、駅前の歩道橋を渡るのも二度目で予期したとおり雲ひとつない富士山が迎えてくれた。われわれの旅もきっとすばらしいものになるに違いない。

往時の塚が残る「岩淵の一里塚」

駅前の道を少し歩くと東海道に入る、前回は蒲原へ行くのに左折地点が分からず困ったが、今回は真っ直ぐ進めばよい。家並みの間から富士山が顔を出す道を進み10.38"最初の目標であった「岩淵の一里塚」に到着。道が左へほとんど直角に曲がる角の両側に一里塚はある、ここは江戸から数えて37番目の一里塚。江戸に向かって右の塚はほぼ往時のままの塚として残っている。また反対側の榎の巨木は、江戸期からのものと推定されているという。当時のままの塚は小さくて反対側の塚は少し大きい、その大きな塚の榎の根元を道路が直角に曲がりながら通る。その先には富士山が浮かんで

いるすばらしい眺めだ、でもはっきりなしに車が通りおちおち写真も撮れないし、ゆっくり景色を楽しむのも難しい。
そこには一里塚の碑と説明板、それに東海道の道標もあった。



左の塚と右の塚が残る岩淵一里塚

岩淵の小休本陣「常盤家」

一里塚から 10 分程歩くと、道端の人の話で常盤貴子の実家があるという。じきに黒い板塀と国旗がひるがえる門が現われる、どれどれと門の表札を見るとマップに載っている「岩淵小休本陣」だった。

小休本陣だから普通の本陣が宿泊用なら、ここは休憩用の本陣ということで立場本陣とも呼ばれる。常盤貴子がこんなすばらしい名家の娘だったのかと驚いた。せっかくだから見学しようと思門をくぐるとガイドのおじいちゃんが出て、「どうぞどうぞ」と声をかけてくれた。かなりの年配の方だったが、しっかりした口調で丁寧に、細かく説明をしてくれた。

ここ岩淵は宝永元年の水害、4 年には富士山が噴火して大地震が起こり、街並は崩壊した。そのうえ田畑は火山灰により大きな被害をもたらした。そこで幕府は東海道の付け替えを行い、新しい東海道は渡船上り場から南に 104 間(187m)離れた高台に街並を移した。この地での渡船は慶長 7 年、対岸の富士郡川成島から岩淵村へ富士川の渡船役が移ってから始まり、渡船名主を 10 人が連番で勤めた。この時、常盤家は他の渡船名主とともに河東(今の富士市)から移住してきました。以来、常盤家は渡船名主を世襲で受け継ぐとともに、村方名主も務めてきました。その上、東海道岩淵間宿の小休本陣として重要な役割も果たしてきました。

小休本陣の常盤家住宅は安政 3 年(1856)以後に建てられたものといわれ、上段の間も備えた造りで建坪は 75 坪もある。変っているのは、三部屋が続く真ん中の部屋は 7.5 畳という半端な広さになっている。1.5 間×2 間の部屋が奥へ 3 部屋も続いている。そして、庭には当時からのマキの木がそびえていた。



常磐家の門



上段の間を見る

富士川は「ふじがわ」それとも「ふじかわ」

常磐家住宅から少し行くと道は右に直角に曲がり下り坂になる、その先で今度は左へ大きく曲がる。そこから細い道が左へ分岐しており、ここが「身延道」の基点でここから道はさらに下って富士川へでる。広い河原の向こうには製紙工場の赤と白に塗り分けられた煙突が何本も建ち、その内の数本からは白い煙が立ち昇っているのが見える。川沿いの道は県道 396 号でかなりの交通量である、左手上流には赤い橋げたの東名高速が走り、背後に雄大な富士山がそびえる景色はまさに絶景である。すばらしい景色にカメラを構えようとしていると、ライダーの青年がちかづいてきて「シャッターを押してもらえませんか」という。一人でツーリングを楽しんでいるようだ、友が引き受けている間に私は彼のオートバイと、道端に咲くアロエの花と一緒に富士山を撮った。そこから少し上流に渡船場跡の常夜灯があり、隣には富士川の開削事業を行い運航の安全が確保されて、江戸への廻米輸送を中心に水運を発達させた「角倉了以」の碑がある。渡船は上、中、下の三箇所あり水量に応じて使い分けていたという。



アロエの花と富士



富士を背に記念撮影

富士川は南アルプス北部、山梨県の鋸岳に源を發し甲府盆地を南下して笛吹き川との合流点までは釜無川と称され、合流地点からは富士川の名で呼ばれる。静岡県に入ると雁金堤の南で東海道と交差し、駿河湾に注ぐ。日本三大急流の一つに数えられる。ところで富士川は「ふじがわ」それとも「ふじかわ」と発音するのか?? 前回の蒲原を歩いた時に、JRの車掌さんは私たちが「ふじがわ」と言ったら「ふじかわ」ですねと言ったのだ。帰ってから調べてみると、正式には「ふじかわ」と濁らない発音とあった。流域の静岡・山梨では「ふじかわ」と呼ばれ、4音の川で2音目が濁るという共通ルールだという。国土交通省の英語表記も「FUJIKAWA」と記載されている、しかし、多くの日本人が「ふじがわ」と発音している。それというのも1180年に源氏と平家が戦った、富士川の戦いを「ふじがわのたたかい」として歴史教科書に掲載されたことに起因しているという。



渡船場跡から見た富士山

富士川の流れを変えて造った「雁堤(かりがねつつみ)」

美しい景色を眺めながら富士川を渡ると、川もを渡る風が火照った体に気持ちが良い。7.8分で橋を渡るとそこに松岡水神社がある、ここは代官古郡孫太夫が堤防普請の成就を記念して創建したという。富士川を渡る多くの人々が安全を祈願したことだろう、ちょっとのぞいて見ると富士山道の道標が見られた。

神社から少し先の四丁河原のバス停付近で東海道は左へ折れていく、すると今までは車の騒音がうるさかったのが嘘みたいに静かになった。やっと本来のペースで歩くことができた、そんなことを話しながら進むと左手に家の屋根より高い堤防が続いているのが見えた。富士川はとっくに過ぎており、何かなと友が地図と首っ引きになって見ていたが、地図では三角形のエリアが富士川の隣にあって水の調整池のようだ。

そんな話をしながら行くとコンビニが見えた、時間も丁度お昼になるのでお弁当を買って、あの堤防のところで日向ぼっこをしながら食べようということに。隣の大通りまで出てコンビニへ入り、私は鮭の幕の内弁当、妻は助六を選びお茶と合わせて925円だった。堤防を上るとそこは広い公園みたいになっており、目の前に富士山が立ちふさがるかのようにそびえていた。すばらしいロケーションの中でいただくお弁当はとても旨かった。食事の後でマップを見てみると、どうやらここが「雁堤」らしいので広場の端にある建物を見に行った。思ったとおりで雁堤の説明と碑があった、それに建物は清潔なトイレだった。吉原までトイレがないから要注意と思っていたのでこれも良かった。とても広いエリアと頑丈な堤防はそもそも何だったのか!!

「雁堤」とは.....江戸時代の始めまで、富士川は富士市の東の方へ曲がっており、度重なる洪水による災害が多発していた。1674年に古郡重高・重政・重年の父子三代が50年以上の歳月を費やして、富士川の流れそのものを直線となる現在の場所に変え、洪水が多発していた場所に遊水地としての機能も持つ2.7kmに及ぶ大堤防「雁堤」を建設した。



雁堤(かりがねつつみ)

大変な難工事で、富士川を渡ってくる千人目の巡礼が人柱になったという。雁が連なって飛ぶ様子に似ていることから「雁堤(かりがねつつみ)」と呼ばれている。

間の宿「本市場」

弁当を食べて 12.30"スタートする、堤防を降りてコンビニのあった大通りまで行くと、「左東海道」の道標と秋葉山常夜灯が並んでいる。でも「左東海道」はおかしい江戸からなら右に行くのだし、江戸へ向かうのなら鋭角に曲がって右へ行くはずもなく、あえて左へという案内も必要ないのだから。そんな話をしながら進むと JR 身延線の高架の下をくぐる。そこから右に折れて 10 分ほどで札の辻跡の案内があり、交差点の角に立派な金正寺を見てさらに行くと、用水が流れておりそこに鴨が二羽うずくまっていた。鴨がいるということはえさとなる魚でもいるのかな。そのすぐ先に一里塚と記された石と一本の木が目についた、何の説明もないが「本市場一里塚跡」で、名前の表示がなくちょっと寂しかった。散策マップにも一里塚跡の記載がなくておかしいと思っていたところだ。一里塚跡から 10 分も歩くと民家の前に東海道の案内と説明板があった、見ると「鶴芝の碑」としてある。読んでみると本市場の鶴の茶屋に建てられた物で、当時ここから雪の富士山を眺めると、中腹に一羽の鶴が舞っているように見えた。これを見た京都の画家が絵を描き、江戸の学者が詩を添えて文政 3 年(1820)「鶴の茶屋」に碑が建てられたという。つまり、富士山の眺めが良かった場所ということになるが、今は家並みが続き富士山は見えない。そこから少し行くと「間の宿本市場」のモニュメントがあった、一里塚跡、鶴芝の碑などは間の宿にあったわけだ。



本市場一里塚跡



間の宿「本市場」のモニュメント

吉原宿の入り口に案内はなく道に迷う

本市場を過ぎて塔の木交差点を渡ると、広い道路の左手には雄大な富士の姿が美しかった。その少し先にちょっと珍しい道祖神があった、「袂(たもと)のさへの神」といわれる道祖神で、ブロック塀がそこだけ凹んで置かれていた。集落を守るため村の入り口に祀られるもので、年号などの刻印はないが江戸後期の物と言われている。高さは88cmありシャクを持つ人型の立派なお姿だ。この道祖神から18分も歩いた所で形がよく似た石の道祖神を見つけた、ここから道は一直線に延びて吉原宿入り口である「志けん橋」へ向かう。真っ直ぐ行けばよいので橋だけを目当てに歩いた、ところが時間的にどうもおかしい。マップでは道祖神と道祖神の間の距離より短いので、橋を過ぎていていると思われるのだが橋が見えない。

間違いなく行き過ぎているので少し戻り、地図をしっかりとチェックして橋があると思われる所まで引き返した。橋といっても低い欄干しかないの見落とししたかと思ったのだが、でも違っていた。もう一本通りを戻って橋の名前を確認するも違う、その時友が「隣にも橋がある」という。10mほど左に橋が見えた、少しだけ戻って左つまり宿場に向かって右へそれる道があった。大通りからそれて橋まで行き欄干を見てほっとした、「志けん橋」だった、マップでは真っ直ぐの道が小さくクランクに曲がっており、橋を渡ってから右へ行くのではなく、右へ曲がってから橋を渡るのだった。

マップには橋の記号が付いていないので、小さく曲がる場所ではよくよく注意が必要だ。しかし、「志けん橋」を渡った所には東海道の西木戸跡の案内があった。橋を渡ると西木戸跡かもしれないが、道が分岐する所に案内標識を立てなくてどうするのだ!!



西木戸跡の案内



喫茶店「MAHALO」

志けん橋から少し行った所に喫茶店をみつけた、道を間違えたこともあって一度に疲れを感じたので休憩することにした。「MAHALO」というハワイアンスタイルのお店だった、とにかくコーヒーを飲んで気持ちを落ち着けると同時に足腰も休めた。ここまで休憩しようにも喫茶店はおるか、お店らしいお店がなかった。吉原の街に入りお店はたくさんあるが喫茶店は見当たらない

かった、東海道を歩くといつも思うのは、愛知県のような感覚で喫茶店を探してはいけないのだ。とても数が少ない、つまりはお客が入らず営業が困難なのだろう。それは愛知県の人々がそれだけ裕福である証ではないだろうか。一杯のコーヒーで30分も休憩してお店を出ると木之元神社があり、東海道はこちらという案内に沿って左折して進み、大通りに出て右折する。ところがほんの少し歩いた地点で道を間違えたことに気がついた、マップには拡大図が載っていて静岡銀行の横にでてくることになっている。その静岡銀行が右前に現われたのだ、先ほどの左折案内はもう一本先の道を指していたのを見間違えたのでは…………。

水鳥の羽音に驚き逃げ出した平家軍…………

吉原の商店街を歩き岳南鉄道の踏み切りを越えてしばらく歩くと、赤白の煙突と一緒に富士山が見える。そして30分ほど歩くと自動車総連のマークと日産労連ジャトコ労働組合の看板がかかる門の前を通る。トヨタ系で言えばアイシンのような会社でトランスミッションを造る会社、ここ吉原では王子製紙、大昭和製紙と並ぶ大会社の一つだ。ここから5分も歩くと和田川の橋を渡った交差点の角に「平家越え碑」がある、碑の説明には治承4年(1180)10月20日富士川を挟んで源氏と平家の軍勢が対峙しました。その夜半、源氏の軍勢が動くと近くの沼で眠っていた水鳥が一斉に飛び立ちました。その羽音に驚いた平家軍は、源氏の夜襲と思い込み戦いを交えずして西へ逃げさりました。



平家越え碑

源平の雌雄を決する富士川の合戦が行われたのは、この辺りといわれ「平家越え」と呼ばれています。近くには民家や工場などが建ち並んでいます、合戦の場が富士川ではなく和田川の辺りとは初めて知りました。でも何故富士川の戦いと呼ばれるのでしょうか??

名勝左富士とは.....

平家越え碑を過ぎると直に立派な石碑と祠の馬頭観世音菩薩がある、石碑の文字は先をピンと跳ねる特長のあるものだ。そこから5分も歩くと名勝左富士の看板が見えてきた。左富士というのは、東海道を西へ行くとき富士はいつも右手に見えるが、ここだけは道の曲がりにより松並木の間から左手に見えるので「左富士」と呼ばれ、街道の名勝となった。現在、わずかに残る一本の老松が往時の左富士を偲ばせる。



現在の左富士



吉原駅前の大昭和製紙工場

この辺りは特に何もなかったもので、富士が左に見えることをことさら大きく取り上げたのだろう。相手が富士だから様になっただけのようである、志けん橋からこの左富士までが吉原宿である。すぐ先には左富士神社があり新幹線の高架をくぐって行くと、一本の松と赤白の煙突が見えてくる。吉原駅前の大昭和製紙の煙突で、さしずめ現在の左富士に相当する景色だと思った。ここからほどなくして JR 吉原駅に 16.00" に到着した、予定通りの時間で 24.200 歩の旅だった。岳南鉄道吉原駅 16.23" の電車に乗り、ジャトコ前駅で降りて駅前のホテル「HISASHI 別館」に落ち着いた。